

〔書評〕

木宮泰彦著 『日本古印刷文化史』（新装版）

中野直樹

はじめに

一、各篇章

本学創立者である木宮泰彦氏の『日本古印刷文化史』（以下、本書という）は、木宮（1988）・『国史大辞典』などで、『日華文化交流史』と共に代表作として挙げられており、氏の著作の中でも多方面から参照されてきた著書である。

まず本書の篇章を示しておく。

平成二十七年（2015）に、吉川弘文館から『日本古印刷文化史』（新装版）が刊行され、今後本書の再評価も行われることと思われる。そこで、本稿では本書の特長などを若干見ていきたいと考える。

また、本稿では右の新装版を用いることとする。以下の構成などはこれによる（本文中の表記などはすべて通行のものにした）。

序文¹

再版序²

自序³

凡例

目次

第一篇 奈良時代（印刷創始期）

第一章 奈良時代の開版

第二章 我が印刷術は独創か

第二篇 平安時代（印刷興隆期）

第一章 平安時代の開版

第二章 支那版本の輸入

第三篇 鎌倉時代（和様版隆盛期）

第一章 奈良版

第二章 高野版

第三章 京洛版

第四章 入宋僧と典籍の将来

第五章 京都に於ける唐様版

第六章 鎌倉に於ける唐様版

第四篇 南北朝時代（唐様版隆盛期）

第一章 入元僧と典籍の将来

第二章 京都禅院の開版

第三章 地方禅院の開版

第四章 元の彫工と開版

第五章 武人の開版

第六章 和様版の衰勢

第五篇 室町時代（印刷衰微期）

第一章 入明僧と典籍の将来

第二章 唐様版の衰頹

第三章 和様版の衰微

第六篇 江戸時代（活字版興隆期）

第一章 活字版の伝来

第二章 勅版と官版

第三章 私版

附録 古刻書題跋集

日本古刻索引

解説⁴

右を見ると分かるように、奈良時代から江戸時代までの日本における印刷の歴史が時代順に示されており、印刷史が通観できるようになっている。また、地方版・私版にも記述が及んでおり、印刷史が幅広く押さえられている。

二、『日本古印刷文化史』の版について

本書は昭和七年（1932）に、富山房より出版された⁵。昭和四十年（1965）に再版が、昭和五十年（1975）に三版が出ており、平成二十七年（2015）に、新装版が吉川弘文館から刊行された（新装版は三版を用いている）⁶。

三、本書に関連して

本書は、著者が旧制静岡高校に赴任直後に東京へ内地留学をした際に集めた資料により完成したものである。著者はこの機を利用して東西の文庫を訪ねている（木宮・小田（1987））。本書は書誌的事項や刊行に関わる事績について

様々な典籍を縦横に利用し実証しており、本書凡例にもある通り様々な本を実見することができたこの機会を活かした記述となっている。

注3に書いた通り、本書の標題は三上参次、序文は徳富蘇峰による。三上氏は、著者の東京帝国大学国史科時代の指導教官である。徳富氏と著者とは、昭和六年に著者が本書の執筆をしていたころ、有坂忠平に紹介され関係が始まった（旧制静岡高校時代の教え子に有坂弘という学生がおり、その父忠平は徳富蘇峰と親交があった。著者は忠平氏の紹介で成篁堂文庫所蔵の貴重書の閲覧をしたり、徳富氏来静の際に講演依頼をしたりするなど、浅からぬ縁があった（木宮（1985）、木宮・小田（同））。

さて、本書の序文で蘇峰は本書のカバーする範囲を評価する一方で、書誌等の誤りについて指摘がなされている。これは、すぐあとに述べるように、長澤氏によっても注意があるところである。

本書の初版が出版されてから今年で八十八年が経っており、再版されたときに本文に手を加えていないこともあって、書誌の誤り以外にそもそも記述が部分的に古くなっている。学界からの本書についての評価については、木宮（1985）に詳しく纏められている。例えば、長澤規矩也の『和漢書の印刷とその歴史』にある重要参考文献の一覧にも本書

が挙げられている。そこには、印刷を文化史としてとらえた見方を評価する一方で、書誌学的記述の誤りが指摘される¹⁰。

また、当時にあつては今より引用に關しておおらかであつたのであろうが、先行研究の引用の仕方にも今から見て危うさがある。例えば、本書三〇一頁から三〇四頁にかけて、島田翰氏の『古文舊書考』が引用されている。しかし、この箇所を『古文舊書考』と実際に比較したところ、著者の記述なのか島田氏の記述なのか、かなり判断しにくい書き方が本書においてなされている（一応典拠は書かれているが、先行説と自説との境界が分らない）。本書の記述を著者の説であると思つて引用すると、思わぬ形でプライオリティを侵害する虞があるので気を付けたい¹¹。

もう一点付け加えておく。本書は、木宮（1985）によれば、木宮泰彦氏の著書『日支交通史』の副産物であるという（本書の注にもしばしば『日支交通史』の某頁を参照せよとある）。このように、本書は中国との関わりを重点的に書いたものである。所謂キリシタン版に關する記述が非常に乏しいというのは、仕方がないことかもしれない。ただ、折角奈良時代から江戸時代までの印刷の歴史を海外との関わりを含めて押さえている本書であるだけに、キリシタン版のことなどももう少し盛り込まれていたらと思うのである。

本書の紹介には西本（1932）と吉田（1932）がある。今回の新装版の末に付された解説（上田（2015））は、日中その他の交流をふまえた印刷史が本書において展開されている点を強調する。

また、木宮氏の著作の中には「禪と印刷」という論文があるが、これは本書の中で中世の印刷に関係する箇所を摘記したものである（木宮（1985）²¹）。

以上、本書の内容およびその周辺のことなどをごく簡単に整理してきた。本書は先学が指摘する通り、内容に若干の修正が必要などところもあるが、印刷史として時代順に記述が並んでおり読みやすく、本邦における印刷の歴史の流れがよく分かる。また、単に印刷関連の記述や書誌情報を列挙するのではなく、なぜそのような印刷が行われたのか、なぜそのような版式となったのかなど、歴史的背景が踏まえられた記述が随所に見える。これには著者の専門分野の知識が動員されており、大変面白く読める。

本書二八〇頁には、南北朝期に印刷された『大般若経』の刊記についての記述がある。『日本古刻書史』が刊記を摘記・入れ替えし、足利義詮と如春が印刷させたかのような記述をしていることを指摘し（実際は刊記に続きがあり、足利基氏が印刷させたものと考えられる）、刊記全文を載せていることなど、著者が可能な限り原本に当たっている

からこそできる仕事である。刊記や輿書を載せる研究書は他にいくつもあるが、摘記の可能性が拭えず、引用には不安を覚えることがしばしばある。原文にできるだけ忠実にあろうとする著者の姿勢を支持したい。

以上、本書に記述された内容をすべて取り上げることができなかったが、本書に関わる点をいくつか述べた。本書は初版から印刷史についての信頼できる本として支持を得てきた。新装版が今後ますます多くの人に読まれることを希望する。

【参考文献】

上田純一（2015）「解説」木宮泰彦著『日本古印刷文化史

新装版』吉川弘文館

海野泰男（1970）「年譜」福原龍藏代表編集『八十年の生

涯 木宮泰彦自伝と追憶』八十年の生涯木宮泰彦自伝と

追憶刊行会

川瀬一馬（2001）『書誌学入門』雄松堂出版

木宮榮彦・小田久夫（1987）『木宮泰彦 その生涯と業績』

創立者生誕一〇〇年記念委員会

木宮泰彦（1932：初版）『日本古印刷文化史』富山房

—————（1937）「思ひ出の数々」有坂弘編『有坂忠平』

有坂弘

- (1941) 「禪と印刷」『禪』（2）雄山閣
- (1965：再版) 『日本古印刷文化史』富山房
- (1975：三版) 『日本古印刷文化史』富山房
- (2015：新装版) 『日本古印刷文化史』吉川弘文館
- 木宮之彦 (1985) 『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』静岡谷島屋
- 駒込武・川村肇・奈須恵子編 (2011) 『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会
- 長澤規矩也 (1952) 『和漢書の印刷とその歴史』吉川弘文館
- 西本 (1932) 「〈書評〉日本古印刷文化史」『龍谷史壇』(10) 龍谷大学
- 濱川榮 (2019) 「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る」『常葉初等教育研究』(4) 常葉大学教育学部初等教育課程
- (2020) 『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿：『日華文化交流史』とその時代 (1) 『常葉大学外国語学部紀要』(36) 常葉大学外国語学部
- 藤井隆 (1991) 『日本古典書誌学総説』和泉書院
- 吉田 (1932) 「紹介」『日本古印刷文化史』『史林』(17・2) 史学研究会

杜澤遜・王曉娟点校 (2014) 島田翰著『古文舊書考』上海古籍出版社 (日藏中国古籍書志)

【付記】

本稿の執筆にあたり、常葉大学共同研究助成（「研究者としての木宮泰彦の意義を検証する試み」代表者：若松大祐）の支援を受けました。また、常葉大学濱川榮氏、若松大祐氏より助言を得ました。木宮泰彦関連資料閲覧に際しては木宮史彦氏からご厚意を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

【追記】

二〇二〇年十月に印刷博物館から『日本印刷文化史』が出版された。本書とはまた別の角度からの考察が盛り込まれており、興味深い本である。印刷をより深く知るための本として本書が挙げられている。

注

- 1 徳富蘇峰による序文（『日本古印刷文化史』に題す）。著者と徳富との関係については後述する。
- 2 再版についての著者による序文である。ここでは、本書を執筆した経緯が説明されている。また、富山房より再版の申し出があったが、初版を直すことができなかった

た旨、記述されている。

3 再版序の次に初版の自序が存する。印刷の歴史を考究する意義について述べており、文化史という大きな枠組みの一部門として印刷史が重要な位置を占めるとする。印刷史の研究は、従来個別的な検討にとどまっていたところ、著者は国内外の典籍を見、不十分ながらその歴史を体系化したと述べる。初版序の最後には、著者の母校である東京帝国大学の指導教官三上参次と、当時の著者の勤務先であった旧制静岡高校校長堀重里から指導・激励があり、また、三上からは題簽を、徳富からは序文をもらったことが書かれている。

4 上田純一氏による。新装版に付されたもの。

5 著者は本書以外にも、『おもしろい日本歴史の話』・『日華文化交流史』・『参考日本通史』・『参考新日本史』・『日本喫茶史』・『日支文化交流一覽図と年表』を同社から出版している（木宮（1985））。また、本書は文部省の精神科学奨励金の助成を受けている（木宮（1932）・海野（1970））。本書自序には、精神科学研究費とあるが誤り（若松大祐氏より御教示）。本書がこの助成金を受けていることは、見逃せない点であるので指摘しておく。駒込・

川村・奈須編（2011）や、文部科学省HP「二 帝国学
士院と学術研究会議」を参照のこと。なお、著者の戦時

下における思想については、海野（1970）、木宮・小田（1987）、濱川（2019・2020）から窺うことができる。

6 再版に際して本文に変更は加えなかった旨、著者による序文にある（前述）。

7 再版・三版いずれも富山房より刊行。

8 新装版は三版の覆刻であるが、三版の奥付は付されていない。

9 例えば、宋版一切経の所蔵先など、現在は本書の記述より多くの場所が見つかっている。

10 本書に列挙される書名などに疑問点は確かにあった。例えば、本書九五頁『秘密寶鑰』は、『秘藏寶鑰』の

誤植ともとれるが、著者の見た本の外題或いは内題がこうだった、若しくは、引用元の書籍がこのように書いていた可能性もあり軽々に判断できない。

11 島田氏の書誌記述にも気を付けなければならないことは広く知られているが、本書三〇三頁にも「島田氏はま、虚構の説をなして居るから遽に信用し難い。」という記述があり、当時の島田氏への認識の一端を窺わしめる。島田氏については、杜・王（2014）に実績が解説されている。

12 筆者が本書と比較したところ、木宮（1985）の指摘通り、論文において新規の記述は行われなかったと見られ

る。但し、若干の誤植訂正が行われている。例えば、本書二百六十二頁に「元宋」とあるが、この論文では「元末」に直されている。

（吉川弘文館、二〇一五年十二月、七二七頁、一万二〇〇〇円＋税）

（なかの・なおき 本学助教）

